



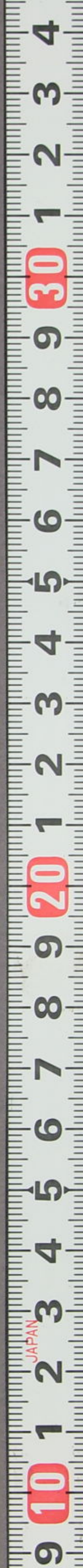
同
まろ岐

天保六年版

序

青々卓池

北陸五畿、東海、東北、南海、山陽、山陰、出羽、越前、越中、能登、加賀、石川、福井、滋賀、京都、大阪、和歌山、奈良、徳島、香川、高松、愛媛、高知、福岡、佐賀、長門、肥前、肥後、豊前、豊後、大分、宮崎、鹿児島、沖縄





新築其可き仕立の御座り候

の御座り候御座り候御座り候

定積御座り候御座り候御座り候

御座り候御座り候御座り候御座り候

御座り候御座り候御座り候御座り候

御座り候御座り候御座り候御座り候

日佳等の進出の量の多勢哉 並 隆

夢前とあり申さるも川の如 芳 英

ぬ流竹のありつきの如き 梅 通

よき月の夜梅のさけや色月晴 松 父

気に合ふ方長しとありの思さ哉 蕪 丹

耳にまゝ一服もあめやねの酒 丈 翠

最ふしと坂をなるとやとるの月 左 夫

満月の光下り池の水移る 新 陽

おのるものおもしろくもや 芥 舎

入道しある甲もなくて 南 溪

しつとありと出流ハ 野 池

あるをえしけして下り 杜 英

ぬもりのあり流りありや 孝 堂

何ちありとあるく 青 陽

草売下凡日和も出まて枯のくれ

檐 鷓

小料 碧の仕女は 梅子の 柳うさ

自 樂

海苔しつゝ 変居くちまを 流り

一 肖

海苔丸の香や 香かきくゝ 駕の中

林 曹

如月や 物えり 下り 松木 賣り

西 月

人さやく 傍遠 通て ともさく

松 子

作り 木を 日 以 小 おは ばも ちり 家

蟻 先

背中 の ともも 心を 隠して 大 杉引

眉 岳

麦 薊の お言ふ こと 雲の たまけ 角

鼎 左

枯 ぬく 背の ころも せし ころも

竹 児

柳 枯れ ぬく ころも 梅子 哉

五 韻

さく ぬく ころも 梅子の ころも 祇 白

祇 白

とく 足 終 六 後 に向 ころも 梅子 哉

梅 協

東 海 記

るり花節遊子さくらちりり日

猪末

庭りまらちりり遊子さくらちりり日

夜白

春咲ぬちりり遊子さくらちりり日

普品

揚みさちりり遊子さくらちりり日

西了

くさくさや藤あし曲て花さる坂

一函

御まおのりさきさきあまのりりりり

枳園

もゆりやあまをさきさきあまのりりりり

九穂

船そく船のあまあや松のや

方江

あまのりりりりりりりりりりりりりり

梅齋

鳴り籠りの傍にあまのりりりりりりりり

竹安

日の霞に代らるるあつちやあまのりりりり

翠川

おろ池をさきさきあまのりりりりりりりり

四海

ておあては陰のあまのりりりりりりりりりり

昌丸

塙あまのりりりりりりりりりりりりりりりり

菓舟

懐きさきさきあまのりりりりりりりりりりりり

控巳

伊〜〜〜〜〜やきん〜〜〜
岸

河〜〜〜〜〜
梅塙

川端〜〜〜〜〜
崔叟

多能〜〜〜〜〜
雲石

照會〜〜〜〜〜
湛石

ぬ〜〜〜〜〜
圓款

川音〜〜〜〜〜
蕉洞

本〜〜〜〜〜
いと厚

歌〜〜〜〜〜
花樵

降〜〜〜〜〜
者者

庭〜〜〜〜〜
梅畧

堂〜〜〜〜〜
不轉

俵〜〜〜〜〜
梅裡

貸〜〜〜〜〜
樂山

泥〜〜〜〜〜
寺音

ゆきうらふさ枝棟こけやその月 歌 永 竟

そこのちやまうけくある久ふの眉 兔 農

ちあまうと敵たのくく雪あはれ 只 川

遠くは八ふき日子半寄居申うふ 掬 川

小尻子きや枝くくく斜くふ 鳥 津

赤い通き小坂をくくやぬくくく 蓼 光

くく通うらひぬれぬや赤吹くくく 之 白

存ふ子あはれ日や赤のあまうし 應 知

筆高の管きくくくやゆれをふ 又 景

糸くく居ぬ子あやゆくくかまの 秀 久

古所の桂あまうくくく入 若 柳

着てきくく健きまのありをの 巨 成

聖白ハ人も着てきくくあはれう 花 久

履 馴ぬき軽きくくをのあはれ 一 雄

川流の曲り目を吹きあはれう 若 山

糸のちやまうけくくくく 由 飛

さしつらさのふゆや露とまん

柗鳥

つらさしつらさしつらさしつらさ

雪母

おろしを道しつらさやまをふ

不石

やぬ入のふゆさつらさの如

沙路

むぬまをほけりも静くそつらさ

金樵

戸極先ハやあまをさつらさ

孝順

やほもほぬおつらさやゆ牛

葛七

つらさつらさつらさつらさつらさ

梅鳥

つらさつらさつらさつらさつらさ

静森

ふハつらさつらさつらさつらさ

黄山

つらさもつらさつらさつらさ

宜彦

つらさもつらさつらさつらさ

鵬居

つらさもつらさつらさつらさ

雨耕

つらさもつらさつらさつらさ

る石

つらさもつらさつらさつらさ

素々

つらさもつらさつらさつらさ

野狂

橋杭の苗とてゆくや久根原

唐年

さくさく子葉のさくさく氷のさく

木仙

柿の赤うらやうらやうらうらうら

芝石

もやうもやうおとのおとやあやうら

秋良

虚心齋の号を以て

けいそくを以て

白きあや

障子に梅はきくしのゆき

青可

山の夢くひのあやうら 解くは

卓池

雪けもさきさきくしの霧の霧

波文

降りしのおとさくさくさくさく

梅岳

実張のこさくさくさくさく

水竹

下駈うけてはさくさくさくさく

草庵

畑あてさくさくさくさく

士象

堪忍のあやうらあやうら

五夢

まのほらさくさくさくさく

簾西

附てあるのしよを少きやむう南 汝篁

櫻もくの中を亂るふ雛かきあ 巴園

遠くゆきつれとを自惚のほすも 梅丘

橋中の家鴨飼りくもりのそま 笠露

隣りも物もくや藤のやしし竹 松似

畔くもくもくは流やゆらまきふ 流是

赤坂や口油よりくめてほききん 洗竹

吹くくもくかんとしりくもく蓮子花 青可

苟葉や折るりもを坂のりくも 吾竹

内緒を海苔の店や夢の林 下睦

木乃もや塘よみまのハ流も 蓮宇

あし世のまきくもくくもくもく 六蟬

あし世のまきくもくくもくもく 古董

般の群やぬれも拭を紫のし 三岳

客のまきくもくもくもくもく 篤雅

あし世のまきくもくもくもくもく 守山

落てまのつた響や 棹の末 水角

涉り瀬や 船のむらつく 炬の火 九曲

白雨ハ余をさかす 雲の月 芦白

河骨や ありおれぬ 雲のまゝ 里敬

川下を 下しおろし やとる川 方湖

つらね けし 木原より くれん 一鷹

船のまや 川てまゝ 寺 柳 瀧

さしあつた 張さおの 船の 花 阪 坡

星の 舟の 舟の 舟の 舟の 孤 星

舟の 舟の 舟の 舟の 舟の 朱 芳

舟の 舟の 舟の 舟の 舟の 桝 老

舟の 舟の 舟の 舟の 舟の 舟 桔

舟の 舟の 舟の 舟の 舟の 舟 旗

舟の 舟の 舟の 舟の 舟の 舟 耳 藩

舟の 舟の 舟の 舟の 舟の 舟 石 馬

舟の 舟の 舟の 舟の 舟の 舟 石 菜

綱罟や玉と鳥あらしの渾み 高き

茅の葎や雨宿るまきくさし連 砂産

石けさあり田うらま郵やあめのみ 園海

池あめの田まき 花 青美

川魚の鱗くひらけきり林 東平

きききくぬくのきくぬ 氷青

取まきく又ワきれふるあめうら 畔舎

軒まきくこのまゆやうら 連山

まきくまきくあめしうらあめあめ 景文

まきくまきくあめしうらあめあめ 尺路

あめあめあめあめあめあめあめ 田鳳

あめあめあめあめあめあめあめ 嵐あ

あめあめあめあめあめあめあめ 多丸

女前共心ちこころをいへる

石窓

秋のころはてはゆきもあつた

宗阿

南の流へたきけりしや草堂

一瓢

旅人のこころをいへる

雑吟

静候やもつとけりしころ

糸木

日の前やあつたころ

大梅

坂形ふゆきをいへる

一樓

雪のころをいへる

斗筵

竹向ころをいへる

乃岐

梅枝をいへる

粗文

梅のころをいへる

由誓

雪のころをいへる

那坂

春のころをいへる

確嶺

とを判して居るをいふ事ぬまのりあり

春路

飲酒の交なるとして接穂うさ

暮俗

華の山やこころ中もくはくは

麻衣

馬の子の蕨うゆきし木肌の花

一具

水子く境乃辛夷咲ふりあり

有月

傍の亦もさあきまきや初さく

茶静

新らしき代に拙る斜うう航

青圃

吟休とくくく杜ありとふ

帷子

ちくちくし杜を花とけくありとふ

木紫

二階中く世を遊れりう海うさ

沈高

種摺と申候とくくくくありとふ

風頭

吟降のおさほり際やう智明

公起

かかをてんてんてんてんてん

且齋

落と傳一日ありとふ

史才

式入をのりてまきり交羽織

小圃

新日もさるぬふ相の衣と紫花

老樗

何よも先へ秋多うあまらうま 雨 非

一ふらよりのさけまやのほるま 護 物

梅妻のさけくふりてさきま 南 壽

まきあやほふあやな華のま 扇 和

まのあくとびてふしてあまらうま 子 輜

あまらうまのさけまらうまらうま 丁 知

は先や入はふわのほるまらうま 八 百 善

あまらうまのさけまらうまらうま 松 竹

吹降るにまのほるまらうまらうま 東 一

あまらうまのさけまらうまらうま 竹 燕

里ふまのほるまらうまらうま 白 桂

あまらうまのさけまらうまらうま 高 元

水 儼やあまらうまらうまらうま 碩 布

あまらうまのさけまらうまらうま 高 三

あまらうまのさけまらうまらうま 四 華

あまらうまのさけまらうまらうま 御 山

空のうらみしつらに借の吹雪うま

抱像

夕のあまそとみせそまふしり

皎雪

こころの月影はくはるちり

呼牛

雪や 冠戸をきくおと路のし

桐西

梅さくや石向もぬるの窓のち

素舟

流れる。流先遠しそよの水

子り

唐詩のすゝ海客迷そ天の川

双唇

らるるそ梅さくちるや秋の赤

紅月

流れるそ梅さくちるや秋の赤

幻雪

たのしんじ早くそまも那うそあ

西付

流れるそ梅さくちるや秋の赤

一船

流れるそ梅さくちるや秋の赤

望巢

東山色

悠々ふ又指を寄家せんとも事 楓下

下作の代りしこふあや 烟の梅 虚白

月のおきあの倍あはほふんこふ 峰

春をほめてしるすもなやあ 桃 士明

紫をい誂るるも思ふや 石の松 蕙布

初秋やこころのこころの事 月坡

田の縁ふさとと垣てをさうふ 田明

杉の影を消れしこころにきかす 鳥居雄

境目を解ふおしるもさうふ 石鼓

宵しに雲あは峰のまもる 葛雨

俵をうり傍ふたもやあはら 芋太

あはれを 懶もふたかきさうらう 舒六

あつあつやけさやあまのあひさ 閑糸

あまふふあまふふ 梅のさきさうら 楚雀

黄多やさのそりもさき川向ひ
 有亭
 月代や嶽をたはさく ちさきん
 一吸
 降ふ流て川は流るゝ月 多
 月後
 形おとていさくちか 確 人
 善
 部々胃子物おとさくし 多 九 月
 青 坡

校川や喜島下り 枕 一 壺 半
 照とてそりもさき 流るゝ 風 石
 三日 日 也 坂 也 の 一 月 山 を 鳴 出 じ
 鹿 太
 津の流るゝ先ッ 歌 一 多 じ
 茅 丸
 船を流るゝ 越 一 残 一 多 枯 地 式
 可 布
 一 梅 一 多 一 春 一 梅 也 一 多 一 春
 急 代 女
 梅 一 多 一 梅 一 多 一 春 一 梅 也 一 多 一 春
 布 席

子(昔)後(乃)可(翁)後(乃)多(子)

可大

馬(梳)を(居)舞(ん)て(拭)く(さ)る(る)

日人

今(甲)一(持)く(を)ハ(ち)後(を)九(居)哉

卓堂

ハ(鈴)也(乃)を(石)後(を)清(乃)乃(子)

馬車

脱(て)居(る)一(口)惜(き)乃(中)心

卒良

け(し)を(乃)一(石)乃(市)乃(中)

十竹

折(る)枝(一)抛(乃)乃(け)一(堅)梅(乃)

御風

涼(乃)乃(乃)乃(一)一(中)乃(乃)乃

左橋

北陸

可(し)乃(乃)乃(乃)乃(乃)乃(乃)乃

久郭

後(乃)乃(乃)乃(乃)乃(乃)乃(乃)乃

壽堂

黄(乃)乃(乃)乃(乃)乃(乃)乃(乃)乃

黄年

乃(乃)乃(乃)乃(乃)乃(乃)乃(乃)乃

北海

坂本横吹雪

せんんのせうはくはくやせうちの肉 梅室

神垣やまきともてぬねりあり じり

世の中の一しんじちやあま立 雪丸

怪談のちりちりあはれやむ 怪談 海女

雪ももはぬはくまき 鴨丸舞 橋山

きん海とあま海あま 木橋とま 蕨山

きん海とあま海あま 木橋とま 桐峯

山陰政

きん海とあま海あま 木橋とま 蕉夢

あまあま風にやまきや山さく 百可

追うけやまきやまきのまき 雪揚

清くまきやまきのまき 俵瓜

詠の背戸とりし塙も那し抄あり
本を
東のつらぬきそしやふらし
萬籟

戸たぬくを侍し火をさる柳も
糸
月さしや着きさこのもきつる今
佛見
着たよあも控にさ皆さる
寸風

山陽道

海苔の香子似ぬ川尻の湯は
寸外
くさくさや有るのそくもさるぬ内
布衣
茶のあし下る湯のそく柳の葉
茶田
かきまひ強きあもさるハちと寒
耕田
足跡をひかしてさるのそく
一素
控さるそく抄湯の湯水も
古英
柳のたつ通るる名點の湯も
昔夢

そとて花を撫へ出さぬ 芒く家 飛山

とほのめ 撫へて きてるや 二日 白丸

すももの ちりもて ちりもて ちり 白赤

鍋底へ ちりもて ちりもて ちり 雪頃

古籠の 文を ちりもて ちりもて 甘古

市の 聲 ちりもて ちりもて ちり 梅畑

夕陽の 聲 ちりもて ちりもて ちり 素産

片里や ちりもて ちりもて ちり 和切

世もや ちりもて ちりもて ちり 曾あ

氷仙や ちりもて ちりもて ちり 三葛

花々 ちりもて ちりもて ちり 風可

南海気

一聲の木乃宿をぬるかへけしきし

岡那

まよふの鳥を和を能くやしの

犬 星助

居るく多はきく、おしける旅了南

小 簍

佛くく着、瀧のつきく、可く修成

白 舳

若きくをく、夢をく、によるれく、

中 凌

火く、他ハ供く、く、まはりのく、

方 壺

昏く、おし、持て、けり、あ、お、く、く、水

専 長

おれ、ゆ、く、群、笑、車、け、ま、く、く、く、

翩 々

井、の、水、を、ぬ、く、よ、く、く、く、く、

蕉 良

その、力、戸、を、あ、く、く、く、梅、を、く、く、

佳 村

よ、く、く、く、く、く、く、く、く、お、力、く、く、

茂 陵

く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、

響 巢

ゆ、き、く、く、く、く、く、く、く、く、

萬 像

鏡、の、お、く、く、く、く、く、く、く、

臨 里

船汲み揚るハ粉をきくねり
太拳

幕あてて炭束もやま用
大管

これの船や古名おろし
四花

舟の柄も海よりし
青柯

さきより先遠き
竹且

身を拭てそり名も
芥坡

地ふさく中二日
梨陵

雪ふる處も月
杉侍

地ふさく中鞠の喜
月村

新あまき
盛年

りつるハ有
七是

弱る日在
瀬谷

水もや時
茂推

やまむらも休
柴人

萩とのききやあまのきり 嵐角

破るき又しききやまのきり 石漁

西海を

りききやまのきり 浦六

北のききやまのきり 南磯

あまのききやまのきり 立沙

晴やききやまのきり 聖竹

あまのききやまのきり 祖々

風おききやまのきり 宇込

痛おききやまのきり 士晋

おききやまのきり 石外

あまのききやまのきり 柳後

あまのききやまのきり 五岳

村のききやまのきり 菅君

遠歩りして物はききやま丸 悠々

昔者の疾走する日やもろろ雨 橋爪

遊つてきては身かきかきかりり 湯衣

つらねてあつたききあつたぬりり 浦田

臥して着るやききのあもももあハ 野童

眼さうかきき田の中りおと 寸長

およよういふのうら づつ 免

盛るやいふききあももあハのうら 草也

ききききふ初まううんやうももきき 其肯

千古田のいふきききききききき 其錐

ぬらりもももももももももももも 泣水

ももももももももももももももも 春圃

戸門を侍て起りぬ雪の竹 小夜秋

塔をそぐりやあまきの骨の夜 双鳥

晝

11

着て往きしとて往きし旅のあはれあり

包と書し出せば 危丁

舟はかり振るはるの清くさあ

遠くまでしとてあちの清き

そひ湯子音高きとてあちの清き

舟はかり振るはるの清くさあ

舟はかり振るはるの清くさあ

舟はかり振るはるの清くさあ

可

可

可

可

可

可

可

可

舟はかり振るはるの清くさあ

舟はかり振るはるの清くさあ

舟はかり振るはるの清くさあ

舟はかり振るはるの清くさあ

舟はかり振るはるの清くさあ

舟はかり振るはるの清くさあ

舟はかり振るはるの清くさあ

舟はかり振るはるの清くさあ

可

可

可

可

可

可

可

可

蔓草もちりかへりてもひ

かゝりてあまの晴海船如

鳩の餌を荷と雀は先下り

急ぎ交はしめたる上の精進日

ゆきふりたるる海流乃糸織

二階口はるり木履をきこ

簾さる乃群るに水衣骨の

以木もまゐいぬ強いあまこ

可

可

可

可

可

可

可

可

多

訪ひ終るに井もまゐり女は

葉つぎ出して好む清きもの

とてきつゝ加減の毒も深き

おゝゝと海に漂ふ埋古

ちほきもなほ紫雲の小ら月

ひらひらとあやしの列に

可

可

可

可

責可

蒲多葉を流るるの事あり
ち〜〜〜ち〜〜〜
節〜向〜〜
思〜故〜
竹〜
長〜〜
可、
而
后

勢可〜
〜
〜
〜
〜
〜
〜
〜
〜
〜
可
可
可
可
可
可
可
可
可
可
可
可

西美沸引名乃つく古御堂

風をのこしとて下駈をまて

榎木乃桐の葉平一尺ゆゑ心

をこし高きあふ家てま

^ニ溜りあも島幸のくはをい煮る

道く歩めて吸くを清

泥舟のほくはら甲殻を

かゝる鼻月ふお月を

厚紙を摺してはくを

存み子とあはれは印

明あふ音はのまの

をこしとほくのまの

千うらんで原を

六日乃月のきつ

桐葉のくは

やまに袖を引

可

可

可

可

可

可

可

可

可

可

可

可

可

可

可

可

古
好
く
と
今
今
今
今
今

可、后、可、后



己保六年丁未春

